認知科学研究
No. 5, 5-7, 2007.
室蘭認知科学研究会

萱野さんの二つの形見

門沢　健也

２０００（平成１２）年４月からの１年間、萱野茂さんが本学の客員教授を務められた折、松名隆さんを中心とする本学の共同研究グループに私も参加させてもらったことが、その後数年に亘り、萱野さんと非常に濃密なお付き合いをさせていただくきっかけとなりました。私はそのことに、計り知れないほどの幸運と幸福を感じています。

萱野さんとの出会いとなった客員教授の任期中、深く印象に残っている出来事に、登別クマ牧場の「チセ」（アイヌの伝統家屋）の建て替えがあります。藤谷憲幸さんを棟梁として、貝沢貢男さん、木幡サチ子さん、木村イトさんら二風谷アイヌの職人さんや奥さんたちが十数人総出で新しいチセを建てたのですが、全体の指導・監修には３３年前に同じ場所にチセを建てた萱野さんが当たられました。クマ牧場の学芸員で本学の非常勤講師をしている前田菜穂子さんからの強い勧めもあって、私は何人かの学生に声をかけ、チセ作りを２週間ほどにわたってお手伝いしました。１１月中旬のたいへん寒い時期だったのですが、アイヌの文化に関心を寄せていた当時の学生、福地康子さん、本宮恵子さん、菅原光将君（建設）、高橋正徳君（機械）、ネパールからの留学生のラム・ギリ君（電電）ら十人以上が、何度もクマ牧場にかよってチセ作りに参加しました。私自身も学生たちとともに、土台の柱を立てる作業から屋根の骨組み、萱での屋根葺きまでチセ作りのすべての工程に参加させてもらい、たいへん楽しく、また刺激的な２週間を過ごすことができたのでした。

屋根葺きのとき、屋根の面の骨組みとなるのは「サキリ」とよばれる棒材で、サキリに屋根の本体となる萱の束を乗せて、その上を「サクマ」という細い枝材で押さえつけ、丈夫な縄でしっかり縛り付けて屋根を葺いていきます。高い屋根の上で、アイヌの職人さんたちは腰にぶら下げた「タシロ」という大きな山刀を使って、萱を縛った縄を手際よく断ち切っていきます。タシロはアイヌにとって大切な道具で、一人ひとりの自作である美しい彫刻を施した鞘に収められており、屋根葺きの作業中、大きなタシロで「ぶつッ」という力強い音を立てて縄を切る姿は、私の眼に何ともかっこよく映りました。

山登りが好きな私は、ちょうどその頃登山用の新しいナタを買ったばかりで、アイヌの人たちのタシロにならって、自分の新しいナタを腰に下げてチセ作りに臨みました。ところが、使い慣れないそのナタで屋根葺きの作業を進めるうちに、誤って自分の右手の親指の付け根をザックリと切ってしまったのです。傷の長さは４センチ、深さは１センチほどで、手ぬぐいで縛って急いで病院に行ったところ、８針ほど縫う怪我でした。

その後も傷を縛った包帯に血を滲ませながらチセ作りを続けていると、萱野さんやアイヌの人たちは笑いながらも、「なかなか根性があるな」と喜んでくれ、萱野さんは次のように言ってくれたのです。

「門沢さん、新しい道具で怪我をしたとき、アイヌは『道具を作った人の心が悪いから怪

我をした』と考えるんだよ。その道具を使い続けると持ち主にまた災いが降りかかる。だから、そのナタは捨ててしまって新しいものを買いなさい。おれが新しいナタのために、鞘を作ってあげるから。」

チセ作りが終わって二風谷の萱野さんのお宅を訪ねたとき、私は言われたとおり、新しく買ったナタを持って行きました。萱野さんは、

「アイヌの伝説に、持ち主に災いをもたらす妖剣の話があって、その剣を沈めたという底無し沼が二風谷の奥の振内（ふれない）にあるから、古いナタはその沼に捨てなさい。なーに、ちょっとした遊びのつもりでさ。」

言われるままに怪我をしたナタを振内の沼に捨て、新しく買ったナタを萱野さんに預けたのですが、その後しばらくの間、萱野さんはお会いしたときも鞘のことに触れることはありませんでした。私は「萱野さんはもう忘れているのかもしれない」と思い、自分自身もそのことは忘れかけていました。それから一年近くたってまた二風谷を尋ねたとき、萱野さんは、

「門沢さん、できたぞー。ナタの鞘だ。」

と言って、美しい木彫りの鞘をくれたのです。

見るとそれは、二枚の板を合わせたものではなく、一枚の厚い板に焼いた火箸で穴を開け、それをまた彫刻刀で丹念に彫ってナタと同じ形に中空を作った、たいへんな手間をかけたものでした。さらに、表面にはアイヌ独特の繊細な鱗（うろこ）彫りが施され、銅の象嵌が飾りに嵌め込まれ、「カヤノ作」という署名も刻んであります。腰に下げるための皮の紐には、小さな白い玉と黒い玉が糸でくくりつけられており、萱野さんは、

「この二つの玉は、門沢さんを山の魔物から守ってくれる大事な玉だよ。もし山の中で魔物に追いかけられたときは、この玉をちぎって投げつければ、魔物は退散するから大丈夫。」

と説明してくれました。

そのときの私のうれしさは、とても言葉では言い表すことができません。それ以来私は、山に登るときには必ず萱野さんの鞘に収まったナタを持って出かけています。幸い、山の魔物にはまだ遭っていないので、白と黒の二つの小さな玉は鞘に付いたままです。

もう一つ、萱野さんが私に遺してくれた大切なものがあります。

客員教授の萱野さんに、松名さんたち共同研究の仲間とアイヌ文化についてインタビューしているときに、日高の山奥の地名についていろいろ教えてもらいました。

「おれが若いころは沙流川や新冠川の奥で、木を伐ったり測量をしたりする山仕事をしていたんだ。新冠川の奥のプイラルベツという川は『しぶきの多い川』という意味。ヌカンライの沢は、アイヌの神様がつけた名前で、おれにも意味はわからない。ヌカンライの沢筋には、クマが冬籠りに使う穴が二つあって、おれたちはその穴を測量の道具を隠しておくのに使ったもんさ。」

登山と魚釣りが趣味の私は、たまたまプイラルベツもヌカンライも行ったことがある沢でした。語り合ううちに、「プイラルベツは出合い（沢の入り口）からすぐのところに大きな滝がある」とか、「ヌカンライは源流から一つ山を越えると、反対側のヌカビラ川に抜けられる」

というようなことを私も知っていることを、萱野さんはことのほか喜んでくれました。

その後萱野さんが、「火の雨氷の雨」という童話を出版されたとき、萱野さんはその本に次のようなアイヌ語の言葉を書いて、私にプレゼントしてくれました。

「門沢健也クユポ
ペライクス　ヌカンライタ
エアラパ　ネイタカ　エンドラ
カラパルスイ　ウッケ　ネナー」

その意味は、

「親愛なる門沢健也さん
魚釣り　ヌカンライへ
あなたが行く　いつの日にか　私を連れて行って
私が行きたいところだよー」

そのヌカンライの沢へお連れする機会がないままに、萱野さんはアイヌの神々の国へ旅立たれてしまいました。そのことが残念でなりませんが、それでもこの二つの萱野さんの形見と、萱野さんと触れ合うことができたこと自体が、かけがえのない私の一生の宝物です。

執筆者紹介
所属：室蘭工業大学国際交流室